大保木輝雄　教授

大保木輝雄教授の経歴と業績

野　瀬　清　喜　　埼玉大学教育学部保健体育講座

大保木輝雄教授は、2014年３月31日をもって、埼玉大学教育学部教授を定年退職されます。

先生は、1973年東京教育大学体育学部をご卒業、その後、同大学大学院体育学研究科に進学、1976年に修了されております。終了後は１年間、母校の教務補佐を勤められ、1978年に埼玉大学教養部に講師として奉職されました。岐阜県飛騨のご出身で高校から剣道の修行に励まれ、専攻分野である武道論、日本的身体論の探求をされながら、非常勤講師を含め37年の長きに渡り、埼玉大学の運営、教育研究活動に貢献されてこられました。

また、先生は1995年の教養部改組により教育学部保健体育講座に転属され、次いで1999年には学部改組に伴い健康スポーツコースに転籍、2006年に保健体育講座に再配置という大学改革の激動の中、附属中学校校長を勤められるなど埼玉大学に大きな足跡を残されました。そのご功績に感謝しながら先生のご経歴と業績を振り返りたいと思います。

１．埼玉大学との縁と教養部の仕事

1977年２月、東京教育大学武道論研究室の卒論・修論発表会が実施され、その発表会には山本邦夫教授（埼玉大学教養部）が参加されました。その際、武道論研究室の渡邉一郎教授から山本教授に紹介され、同年４月より教養部の非常勤講師（木曜日３コマ）として採用されることになり、翌1978年４月には、志藤義孝先生の退官にともなう人事で専任講師として採用されました。

当初の教養部での先生の仕事は通年10コマの授業、スキー教室、レクリエーション委員などであったそうです。着任当時、実技は１・２年生必修であり、１年間で３種目＋理論（１年次体育、２年次保健）を履修することになっており、年間120コマの授業を、山本、松尾、松井、高橋、大保木の５人の専任が50コマを担当し、70コマは非常勤講師が担当していました。その後、定員増により野田先生が着任され、山本先生の退官人事で有川先生がスタッフに加わりました。ほどなくカリキュラムの再編が図られ､実技は前期･後期で２単位､体育理論２単位を履修することになり、体育は予算配分の減少により必修科目から選択科目となりました。

退官された山本先生の一般体育に対する考え方は、学生になるべく多くの、その道のプロに接する機会と一流の指導を体験させることにあったそうです。その昔、体育史の岸野雄三先生、運動学の金子明友先生が非常勤講師として教鞭をとられていたと聞き、大保木先生は「若輩の自分が何をどのように指導すべきなのか」と大いに悩まれました。先生の担当種目はソフトボール、テニス、バレーボール、卓球、テニスそして体育理論で、体育の一般理論はおこがましくてできず、自分の専門としていた武道史の資料として扱っていた、「猫の妙術」、「兵法家伝書」などの話をしたそうです。その後、教育学部に転属になり、学校訪問や研究授業などで本学の卒業生と出会う機会が多くなり、その折に卒業生から、「先生の体育理論受けました。たしか猫の話。」と覚えていてくれるが、その内容について触れることはただの一度もなかった。無謀だったかつての自分を思い知らされ冷や汗をかくことしばしばであったと振り返っておられます。

しかし、高等師範出身の大ベテランの先生方や新進気鋭の若手指導者との出会いが何よりの財産であったようです。各曜日に出講される大先生方との話、テニスの極意、バスケットドリブルの極意、指導の極意、人生の極意等々、毎日話が弾み、担当曜日であった木曜日には非常勤の先生方と木曜会と称して懇親会を開いていました。剣道以外の種目や研究についての論議は武道研究のための多くの示唆を得たのみならず、人的交流が深まるにつれ、新しい非常勤講師の手配もスムーズにできるようになったとのことでした。

「教養部は学生を抱えていない分、研究活動は大いにできる」。これは着任早々山本先生に言われた言葉です。先生の専門は陸上競技史。当時先生は、剣道と体育史を担当されていた志藤義孝先生の後を継ぎ、埼玉県内の武術史研究を紀要などに発表、それゆえ教育大武道論研究室の渡邉一郎先生との親交もあり、教育大での出会いとなりました。そのような事情もあり、土日などは県内の調査に出かける山本先生のアッシー君と助手をかね随伴しました。調査の内容は、埼玉県内の神社、仏閣に奉納されている武術関係の奉納額の調査や、古き道場、そしてかつての武術家の末裔の方々への聞き込みなどでした。山本先生に資料を渡され、最初に紀要にまとめたのは、「柳剛流」についてでした。資料を読み込んでいくうちに、「柳剛流」は、武士たちの剣術とは大いに違うということが分かりました。修行録に記されていた座右銘は「日常に話するとも真剣と　思うてぞ　言葉大事とぞ知れ」、「負けてのく　人を弱しと思うなよ　知恵の力の強き人なり」。命がけをテーマとしている武士たちの剣術との落差に驚いたそうです。

県内各地に点在する豪農が有する道場は、今日でいうコミュニティーセンターであり、日本的スポーツの先がけ的役割を果たしていたのではないか、そんな思いを募らせる中、山岡鐵舟が竹刀剣術（撃剣）と組太刀稽古の融合を図り、明治15年に開いた無刀流の道場「春風館」に、多くの柳剛流剣術家たちがこぞって入門していた事実も究明されました。

このような調査研究は卒論の「一刀正伝無刀流の形成過程」で取り上げた山岡鐵舟以来のことであり、当時の研究の関心は武道における「気」の問題であったので、何を今さらと思いしぶしぶ取り組んだことであったが、鐵舟が若きころ柳剛流岡田道場に入門していたことに驚き、新たな発見に心を弾ませたと振り返っておられます。また、熊谷の馬庭念流継承者中村家と鐵舟の縁が深いことも判明し、近代剣術を育んできた農民武術の在り様に関心が向き始めたそうです。調査が進むにつれて、かの渋沢栄一が世に出ることができたのも、撃剣（今の剣道）道場での人的交流が背景にあったことも明らかになりました。調査研究再開の縁を繋げて下さった山本先生に感謝、埼玉県剣道30年史や50年史の原稿を執筆できたのも、埼玉という土地柄が剣道研究にとって絶好のフィールドであり、武道の歴史にあらたな視点を見出せたことが幸いしたと語っています。

これらの調査研究の成果とは別に、武道学会での発表は、修士論文で取り上げた近世武芸の「気」をテーマとして発表することに決めていたようです。精神病理学者木村敏氏の「気論－あいだ性－」に示唆をうけ、しばらくは武道伝書に記述された「気」の解明に励んでいかれました。一方、教養部に非常勤講師として一刀流の基礎基本を教授されていた清野武治先生の実技授業を学生に交じって受け始め、それが機縁となり、塩入先生とともに、清野先生の勤務校であった順天堂大学に通い、一刀流の組太刀を学ぶことも許されました。院生のころ書道家寺山旦中先生の縁で中野の鉄舟会で学んだ直心影流（勝海舟が学んでいた流儀）と一刀流は現代剣道（防具を着用し竹刀で打ち合う方法）の元祖ともいうべき流儀。この二つの流儀を学ぶことによって、体験を通して剣道における「気」を読み解くことができるのではないか、また、現代剣道の「一本」という規定の根幹となった「気剣体一致」（直心影流）や「心気力一致」（北辰一刀流）の内容をより深く認識

できるのではないか、という新たな課題に取り組めているのも、埼玉大学に縁があったからこそと述べられています。

それらにも増して大きな影響を受けたのは、志藤義孝・塩入宏行の両先生でした。両先生はタッグを組み、着任早々の新任に剣道部の監督を任せ、学生指導の在り方や剣道の何であるかを徹底的に仕込み、それのみならず人としての在り方も、家族の一員のように接し教え込んでいただいた。「やたら難しいことを言っても人に解ってもらえないよ」と志藤先生。「翻訳できる文章を書け」と塩入先生。そして剣道部での活動は剣道教育の研究室兼実験室と同じだと諭されました。

話は変わりますが、着任時は、教養部の厚生補導経費によるサービスプログラムとして冬季スキー教室が実施されており、教養部着任前、東京の藤村学園のスポーツクラブ（藤村スイムスクール）で臨海教室、スキー教室を担当していた経験からその全てを任せられることになったそうです。新潟県岩原スキー場で３泊４日の教室（40名募集）、そこで実施したことは、体育教員のみならず、若手教員の参加を募りスタッフとしてお願いし、非常勤講師としてスキーの指導者をお願いし学生のみならず、教員のスキー講習会を開催し技能向上を目指しスキーファンになってもらうことでした。ドイツ語、英語、ロシア語、フランス語、中国語、日本史、数学、社会学、法学など教員が参加し、教養部の一大イベントとなり、若手教員の研修の場として機能し、数年後は、スキー実技指導を引き受けてくれる教員も現れるほどでした。ここで実施したことは、参加教員に経済的負担をかけず、昼間はスキーを楽しんでもらい、夜はカニパーティーなどゆっくり飲み食いをしながら、教員同士の親睦を深めることに気を配り、体育教員の指導をつぶさに見ていただき、学生と共にスキーを楽しんでいただきながら、体育という教科の実態を見ていただく機会をつくることでした。

とにかく参加していただく先生方には徹底的に滑ってもらい、夜は徹底的に親睦を深める。その効果あってか、数年後には、教養部新任教員の研修の場ともなり、全員が暗黙の内に義務づけられ参加することとなったそうです。ある語学の先生がこんなことをつぶやきました。「板も担げなかった学生が四日目にはこの山の天辺から下りてくるようになれる。日々の練習効果がはっきりと目に見えるなんてすばらしい。果たして語学は？」。この言葉に勇気づけられ年々参加希望学生が減少する中、留学生の参加もあって、なんとか教養部改組の年（平成６年）まで続けることができました。この行事に加え、学生課の厚生補導プログラムのスキー実習をも引き受けることになり、この企画は後に、埼玉大学部活動リーダーシップトレーニングと銘打ち保健体育講座の先生方との連携で実施され発展的に解消されました。

一方、保健体育講座の野沢先生が実施されていたスキー実習や、厚生補導スキー教室が絶大な人気でした。スキー検定試験の実施もあってか、学内の基礎スキー部の学生も多く参加していました。先生は野沢先生にお願いし、蔵王で実施されたこの実習に参加しました。日本で初めて実施された蔵王インターシーの翌年のことでした。その年は一班担当オーストリースキー留学から帰ったばかりの清水先生（福井大学）の補助員として付き、指導術、スキー術を学び、長年の疑問（ヴェーレンテクニック）が解決し、清水先生との記念すべき出会いであったそうです。そのお礼に差し上げた野袴がきっかけで、後に清水先生は居合に凝り、刀を打つことにもなったとのことです。また、清水先生は、すべての技が出来るスキーロボットを開発しNHKでの放映もあり世界のスキーの常識を変え、カービングスキー板の開発の契機となる貢献もされています。清水先生のスキー操作のための身体技法は極めてシンプルで、私にとって仰転すべきことがらであり、目からうろこでもあったと述べられています。また、ロボットがシンプルな操作でスキー技術のすべてが

できるそのカラクリが、清水先生のスキー実践を通じての身体感覚（股関節部の疲労）がヒントであったことを聞き、運動学の在るべき姿を実感した瞬間でもあった。「果たして剣道では？」と、剣道技法の追求に拍車がかかったのはこの時からである。保健体育の先生方や非常勤の先生方との本音で語り合える関係もでき、実習での楽しみとなったなどと述懐されています。

２．教育学部への配置換え

1991年（平成３）、大規模な大学改革が実施されました。これは戦後新たに出発した大学教育が40年を経て、学生の急増にともなう社会の現状にあわなくなってきたことと、米国からの規制緩和要求の一環として改善を求められてきたことを受けてのことであり、大学設置基準の大綱化でありました。それまで実施されていた大学の開設授業科目は「一般教育科目」、「専門教育科目」、「外国語科目」、「保健体育科目」に区分され、修得単位数が定められていましたが、それらを撤廃し、個々の大学が社会の要請に対応しつつ、特色ある教育研究を展開できるように緩和されました。「大学は、学部、学科又は課程ごとに、人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的を学則等に定め、公表するものとする」（第２条の２）、「大学は、当該大学、学部及び学科又は課程等の教育上の目的を達成するために必要な授業科目を自ら開設し、体系的に教育課程を編成するものとする」（第19条）。以上に２点を規定するに留めました。大学のスクラップアンドビルド政策の幕開けで、まずは教養部改組から始まったのです。

教養部は各学部への分属といった最悪のシナリオを避けるため、新たな学部開設に向け様々な試行錯誤をしながら草案を作り上げましたが、他学部の冷ややかな視線を受け、結局、平成６年に各学部への分属が決定されました。翌年、体育と英語の一部が教育学部への転属となりましたが、当時の教養部事務長は「教養部と教育学部と教養学部が協力すれば、おもしろそうな新しい学部ができたのに」と漏らしていたそうです。つまり、教養部の単独改組はありえず、大学全体を取り込んだ改組でなければ何もできないということでした。大局的に事態を捉え、埼玉大学そのものの特徴を世に示すためのドラスチックな改組に取り組む姿勢が欠如していたのだ、と思い知らされたと先生は振り返っておられます。

この政策は、大学の教育研究の質を保証するため、自己点検・評価の義務付け、認証評価制度の創設へと進行し、今日の教育学部再編へと繋がっていきました。平成７年（1995）、教育学部に転属となり、当面、一般体育８コマ、教育学部の授業を２コマ担当することになり、平成11年（1999）に教育学部改組に伴い、野沢先生、戸部先生とともに健康スポーツコースに所属されました。20名定員のうち、８名を推薦入学に当て、卒業後のことも考え、スポーツ活動優秀者を募集し、日本体育協会のスポーツ指導員（スポーツプログラマー、初級指導員）の資格が取れるようなカリキュラムを編成していきました。野沢先生の発案で、夏季の林間学校・冬季スキー教室など野外研究室主催の行事に健スポの学生を参加児童・生徒のリーダーとして組み込み、社会体育の指導者としての資質向上を目指しました。ここでも、かつて藤村学園のスポーツ教室担当で、臨海教室、スキー教室の経験が活かされたと語っておられます。このプログラムは学生にとっても楽しみとなっていましたが、野沢先生の小学校校長就任もあり４年間で閉じたそうです。８年間の短き期間でしたが、学生にとっては教科教育の縛りが少なかったため、自分の希望科目を多く履修できることに加え、学年の懇親会も開かれ家族的雰囲気で、のびのびと生活できたようです。

そして、平成18年（2006）学校保健講座の新設にともない、保健体育講座に再配置となり、翌

年、塩入先生が退職されたことにより、剣道の授業を引き継ぎ、自分の専門とする武道の話をする機会が増えました。ようやく武道という文化の骨格が見えてきた頃でもあったので、初めて武道を中核とする日本的なるものを講義内容とする授業が持てるようになったそうです。ところがその年、附属中学校の校長要請が学部長からあり丁寧にお断りしましたが、野沢先生から説得され、校長経験をされていた塩入先生に相談し引き受ける決心をされたようです。

「不安を抱えたまま、中学校の生活が始まった。これもまた転機となった」と語っておられます。この頃、中学校武道必修化を見据えた議論が盛んになったこともあり、中学校武道教材の開発が急務となっていたため、これを機に、武道研究の方向を教材研究に転換し、科研費申請課題を「武道固有の身体技法に関する基礎的研究－中学校武道の教材のために－」として申請したところ採択されました。21年、22年、23年と附属の生徒や近隣のフレンドシップ事業（寒稽古）に参加している小中学生を対象に指導実践を試み調査を実施。成果を武道学会に発表。中学校の剣道指導における「武道の特性」をどのように示せばよいのか、という問いに対し、どのように答えるかが当面の課題となり、現在も事例研究を続け、中学生に解りやすく説明するための具体的な方法を検討中であるとのことです。

中学校での３年間、教育現場と附属学校園主催の講習会などを通じて、義務教育の重要さを肌で感じることができた。教員集団（附属と大学の一体化）と保護者集団が生徒集団を育むことが急務なのである。それ故、校長の職務は、附属と大学の教員交流を図り、保護者を交えて、これからの教育を共に議論し合いながら生徒を育める仕組みをどのようにつくれるかということだと認識した。三者の橋渡しは困難を極めるが、できることから始めようと考え、まずは、研究協議会の在り方を、附属の教員と学部の教員がそれぞれの立場を生かしながら教科の在り方を一緒に考え、参加者に提供し、研究協議会での議論を深める、といった方向に向けた。などの校長時代の取り組みと今後の課題を述べられています。

３．社会的活動について

大保木先生は、剣道部活動が実験室兼研究室と位置づけ、塩入先生のプランのもと、様々な活動を続けてこられました。昭和43年、国立大学の教育学部生の資質向上を図るために全国教育系大学の各種大会が開設され、剣道もこの年から全国教育系大学剣道大会兼ゼミナールが開催されました。第11回大会から埼玉大学が全国教育系大学剣道連盟の事務局を引き受け、現在も国立青少年オリンピック記念青少年センターで実施されています。本学の学生を幹事長として学生の主体的運営と大学に所属する教員集団の教育と研究の組織を立ち上げ、剣道指導に関わる出版事業など、多くの仲間の力によって貢献できたことに感謝の言葉を述べられています。また、剣道部員もこの全国大会での優勝を経験し、教員となっても即戦力として活動できる力を身に付けることができたことも大きな成果であったようです。これらの努力の積み重ねが塩入先生退官の年、平成18年11月に開催された全日本女子学生剣道大会の優勝として結実しました。埼玉大学の存在を世に知らしめてくれた学生たちの頑張りにも感謝するとともに敬意を表しておられました。

また、フレンドシップ事業として位置付けていただいた寒稽古に、近隣のみならず、塩入先生を頼って世界各地からの参加者も加え、例年2500人以上の参加を見ることができるようになりました。

全日本剣道連盟が立ち上げた社会体育指導員養成講習会の歴史担当講師として参画し、『剣道

社会体育教本』や『剣道の歴史』の出版、その後「剣道指導の心構え」（平成19年制定）の策定に関わったこと、それに基づいた『剣道指導教本』の改訂委員など、競技とは別の立場で「剣道」に関わってきたことも大きな功績であります。

最後に大保木先生の人柄とエピソードについてご紹介をさせていただきます。毎日、剣道場から聞こえる学生に対する先生の叱咤激励の声、竹刀の音と気合い、稽古後の流れる汗とにこやかな笑顔、人に対する思いやり、礼と義、全ての学生に声をかけられる姿勢など、人として学ばせていただくことが沢山ありました。映画監督の横山博人氏は先生の『武芸の達人たちを斬る』の講演を聞き、「一時間半の話が２時間近くになっても誰も席を立つ人がいなかった」「私はメモをとりながら話を聞いた。大変勉強になった」と述べています。また、「剣道の起源は韓国である」という国際的な論争でも「剣道で着用する袴の腰板をつけるのは侍だけです」とその論を喝破されています。

まだまだお元気で活躍できる先生に去られることは、大学にとって、また我々、保健体育講座スタッフ、学生にとって大きな損失です。特に国立大学改革がせまる中、この先どのような歩みをするのか、手探り状態の今日、経験豊かな先生のお力添えをいただけなくなることは残念としか言いようがありません。今後とも私たちの先達として暖かくお導きください。

以上、拙い文で意を尽くせませんが、先生の輝かしい業績の一端を紹介させていただきました。

長い間、本当にありがとうございました。

略　　歴

氏　　名　　**大保木　輝　雄**
生年月日　　1949年３月３日
専攻分野　　武道論（日本的身体論）
所属講座　　保健体育講座
担当授業科目　スポーツ実技、健康・スポーツ科学、シーズンスポーツＡ．Ｂ、体育学演習、武道Ｂ（剣道）、身体・スポーツ文化論、体育概説、保健体育科指導法Ａ、体育学特論Ｂ、体育学演習Ｄ、課題研究Ⅰ・Ⅱ（大学院）
本　　籍　　岐阜県
現 住 所　　〒364-0007 埼玉県北本市東間８－179

(1) 学　　歴

1967年３月　岐阜県立斐太高等学校卒業
1968年４月　東京教育大学体育学部武道学科入学
1973年３月　同上　卒業
1973年４月　東京教育大学大学院体育学研究科修士課程入学
1976年３月　同上　武道論専攻修了（体育学修士）

(2) 職　　歴

1972年４月１日　学校法人井の頭学園藤村中学・高等学校専任講師（1975年３月31日）
1976年４月１日　東京教育大学教務補佐員体育学部（1977年３月31日まで）
1977年４月１日　埼玉県立衛生短期大学非常勤講師（1988年３月31日まで）
1977年４月１日　埼玉大学非常勤講師教養部
1978年４月１日　埼玉大学講師教養部
1979年４月１日　埼玉大学助教授教養部
1994年４月１日　埼玉大学教授教養部
1995年４月１日　埼玉大学教授教育学部（現在に至る）
2008年４月１日　埼玉大学教育学部附属中学校校長（2011年３月30日まで兼務）

派　　遣

1990年２月１日　ミラノ大学、イタリア剣道連盟より日本文化セミナー、剣道デモンストレーション実施の為招聘され出張（４月31日まで）
1990年～1994年　ストックホルム剣道セミナー参加の為研修（各年夏季３週間）
1993年11月15日　国際交流基金（剣道使節団）南米派遣（ベネズエラ・ブラジル・アルゼンチン）の為出張（12月９日まで）
2001年６月１日　国際交流基金（剣道使節団）南アフリカ共和国・マラウイ・トルコ派遣の為出張（６月16日まで）

(3) 業　　績

(a) 研究的業績

［編著書］

1．1983年11月　『埼玉県剣道連盟三十年史』埼玉県剣道連盟、194頁（共編）

2．1987年４月　「技術学習のまえに」『剣道の学習指導』不味堂出版、199頁（編集、共著41-63頁執筆）

3．1988年３月　『日本武道学研究』島津書房、732頁（編集、分担執筆）

4．1990年３月　『きそうスポーツ（剣道・フェンシング）』岩崎書店、79頁（単著）

5．1992年６月　『ゼミナール現代剣道』窓社、292頁（編集、分担執筆）

6．1996年３月　『教育剣道を培った人々』いなほ書房、471頁（編集、分担執筆）

7．1998年10月　『剣道　社会体育教本』全日本剣道連盟、233頁（分担執筆4-11頁）

8．2000年３月　『武の素描―気を中心とした体験的武道論』日本武道館、217頁（単著）

9．2002年10月　『五十周年記念誌』関東学生剣道連盟、334頁（編集、分担執筆）

10．2003年１月　『剣道の歴史』全日本剣道連盟、625頁（編集、分担執筆）

11．2003年５月　『埼玉県剣道連盟五十年史』埼玉県剣道連盟、306頁（編集、分担執筆）

12．2008年７月　『剣道指導要領』全日本剣道連盟、180頁（編集、分担執筆1-4, 148-167）

［論　文］

1．1976年２月　「日本的身体論に関する一考察―近世武芸伝書にみられる気の問題を中心として―」（修士論文）

2．1976年７月　「日本的身体論に関する一考察―近世武芸論にみられる〈気〉の問題を中心として―」『武道学研究』（日本武道学会）９巻１号、45-52

3．1979年10月　「埼玉県の柳剛流（その１）」『埼玉大学紀要（体育学篇）』第14巻、21-35

4．1980年９月　「埼玉県の柳剛流（その２）」『埼玉大学紀要（体育学篇）』第15巻、35-47

5．1980年９月　「埼玉県の念流（その２―四分一家・中村家の念流―）」（山本らと共同執筆）『埼玉大学紀要（体育学篇）』第15巻１-33

6．1980年12月　「武道と身体」『体育科教育』vol.28-13、大修館書店、42-43

7．1982年10月　「近世武芸における〈かた〉と〈き〉の関係についての一考察」『大村喜吉教授退官記念論文集』吾妻書房、329-338

8．1984年３月　「武芸における〈気〉に関する諸問題―身体論的視座から―」『武道学研究』（日本武道学会）16巻３号、15-21

9．1988年３月　「武芸心法論についての一考察―事（こと）的世界の解釈をめぐって」『日本武道学研究』島津書房、11-21

10．1991年10月　「武芸心法論についての一考察（その２）―『藝術大意』をめぐって―」『埼玉大学紀要（体育学篇）』第24巻、51-56

11．1992年６月　「剣道における〈ま〉と〈き〉」『ゼミナール現代剣道』窓社、34-41

12．1996年10月　「武芸心法論についての一考察（その３―近世後期の剣術伝書をめぐって―）」『埼玉大学紀要教育学部』第46巻１号、85-89

13．1998年10月　「武道教育における心の問題―『天狗芸術論』を中心に―」『埼玉大学紀要教育学部』第48巻１号、81-86

14．1999年10月　「武道の特性についての一考察―『かた』の問題を中心に―」『埼玉大学紀要教育学部』第49巻１号、55-59
15．2004年10月　「近代剣道の系譜―埼玉県の事例―」『埼玉大学紀要教育学部』第53巻１号、129-141
16．2007年10月　「剣術・撃剣の身体技法―『一本』の思想解明のための覚書―」『埼玉大学紀要教育学部』第56巻１号、163-173
17．2009年10月　「武道の特性に関する覚書―『気』の観点から―」『埼玉大学紀要教育学部』第59巻１号、21-29

［研究調査報告書］
１．2012年６月　「武道固有の身体技法に関する基礎的研究-中学校武道教材のために-」文部科学省科学研究助成事業研究成果報告書（基盤研究Ｃ　2009～2011年度）

［事　典］
１．1996年３月　『剣道用語辞典』全日本剣道連盟、「間」、「機・気」など20項目にわたり分担執筆・編集
２．2009年３月　『剣道事典』、東京堂出版、編集・執筆

［口頭発表］
１．1975年９月　「武芸における〈気〉の研究」日本武道学会第８回大会
２．1976年９月　「日本的身体論に関する一考察―〈かた〉の意味について―」日本武道学会第９回大会
３．1977年９月　「山岡鉄舟の剣術理念に関する一考察―」日本武道学会第10回大会
４．1978年９月　「近世武芸伝書にみられる〈気〉の研究―中国気論との関連から（その１）―」日本武道学会第11回大会
５．1979年９月　「近世武芸伝書にみられる〈気〉の研究―中国気論との関連から（その２）―」日本武道学会第12回大会
６．1980年９月　「日本的身体論に関する一考察―武芸における〈かた〉と〈き〉の関連について」日本武道学会第13回大会
７．1981年９月　「日本的身体論に関する一考察―熊沢蕃山を『藝術大意』を中心に―」日本武道学会第14回大会
８．1982年９月　「武芸における気論に関する諸問題」日本武道学会第15回大会
９．1983年９月　「武芸における気論に関する諸問題（2）―間との関連から―」日本武道学会第15回大会
10．1984年９月　「剣術の〈理〉に関する一考察―〈病気〉を中心に―」日本武道学会第16回大会
11．1985年９月　「近世武芸における心法に関する一考察―〈勝負〉を中心として」（大保木他）日本武道学会第17回大会
12．1985年９月　「近世武芸における心法に関する一考察―現代剣道における心的現象との関連から―」（長尾、大保木）日本武道学会第17回大会

13. 1986年９月　「武芸心法論の意義についての一考察」日本武道学会第19回大会
14. 1992年９月　「武芸心法論についての一考察（3）―近世後期の剣術関係伝書をめぐって―」日本武道学会第25回大会
15. 1999年９月　「剣道の特性に関する一考察」日本武道学会第32回大会
16. 2010年９月　「武道の教材化に関する一試論―新学習指導要領をめぐって―」日本武道学会第43回大会
17. 2011年９月　「武道の教材化に関する一試論(2)―武道特有の言語とその体験をめぐって―」日本武道学会第44回大会
18. 2012年９月　「武道の教材化に関する一試論（3）―生きる姿勢とその身心技法―」日本武道学会第45回大会
19. 2013年９月　「剣道の本質を踏まえた指導の考察」日本武道学会第46回大会

(b) その他の業績

［その他（解説）］

１．1976年６月　「剣風を探る其之二」『剣道』第１巻２号、正高社
２．1976年８月　「剣風を探る其之三」『剣道』第１巻３号、正高社
３．1976年８月　「無刀流剣術大意」『剣道』第１巻３号、正高社
４．1985年５月　「その時マッケンロウに何が起こったか―淡々としたプレーの裏で見せた達人の境地、その１」テニス月刊誌『スマッシュ』６月号
５．1985年６月　「その時マッケンロウに何が起こったか―淡々としたプレーの裏で見せた達人の境地、その２」テニス月刊誌『スマッシュ』７月号
６．1985年　「近世武芸伝書を読んで」『筆禅』第５号、筆禅会
７．1988年　「剣道史からみた山岡鉄舟」『筆禅（鉄舟特集号）』第10号、筆禅会
８．1989年　「剣と日本文化」『筆禅（日本文化特集号）』第11号、筆禅会
９．1988年３月～７月　「埼玉の剣道第一部」埼玉新聞連載16回、埼玉新聞社
　1988年９月～12月　「埼玉の剣道第二部」埼玉新聞連載８回、埼玉新聞社
　1989年２月～３月　「埼玉の剣道第二部」埼玉新聞連載２回、埼玉新聞社
10. 1993年７月　「日本武道学会・〈気〉の研究をふりかえって」『月刊武道』８月号、日本武道館
11. 1997年10月～98年12月　「武の素描」15回連載。『月刊武道』、日本武道館

［その他（資料）］

１．1979年～1994年　「スポーツテストを通してみた埼玉大学学生の体力・運動能力について」第12報～第27報『埼玉大学紀要（体育学篇）』埼玉大学教養部、（松尾他５名）
２．1991年10月　「『師家姓名』を読む」『埼玉大学紀要（体育学篇）』第24巻、93－110頁（加藤、塩入、大保木）
３．1992年６月　「剣道関係年表」『ゼミナール現代剣道』窓社、267－273頁

(c)［競　技］

１．1981年７月　全国教育系剣道大会男子団体優勝（監督）

２．1985年７月　　同上
３．1992年７月　　同上
４．1993年７月　　同上
５．1988年11月　　全日本剣道連盟剣道７段
６．1989年６月　　同上　　剣道教士
７．2006年11月　　全日本女子学生剣道大会優勝（監督）

(4) 学会等所属団体およびそこでの活動

日本武道学会（1975年４月～、1989年より日本武道学会理事、2001年より日本武道学会剣道分科会幹事長、2007年企画委員長、2008年剣道分科会副会長）
日本武道学会埼玉支部（1975年４月～、常任理事）
スポーツ史学会（1987年４月～）
スポーツ人類学会（1989年４月～）
人体科学会学術会員（1993年４月～）

(5) 大学における教育活動

課外活動　剣道部顧問・総監督

(6) 社会的活動

筆禅会参与（1980年４月～2005年３月）
全国教育系大学剣道連盟事務局長（1988年４月～2013年６月）
全国教育系大学剣道連盟副会長（2013年７月～）
埼玉学生剣道連盟理事長兼事務局長（1999年４月～）
全日本剣道連盟社会体育指導者講習会（初級・中級・上級）講師（1997年～）
全日本剣道連盟長期構想企画会議委員（2005年～2009年）
全日本剣道連盟幼少年剣道指導要領改訂作業部会委員（2006年～2008年）

(7) 賞罰

日本武道学会賞（奨励賞）（1983年）
全日本剣道連盟60周年記念特別表彰（2013年２月11日）
「剣道指導の心構え」の策定（長期構想企画会議）
「剣道指導要領」の発刊（幼少年剣道指導要領改訂作業部会）

（2013年10月31日提出）
（2013年11月21日受理）